様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １２ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２７４７

研究課題名（和文）複合的場面緘黙児の実態解明と教育機関と第三者機関の連携した支援の実践と効果の検証

研究課題名（英文）Elucidation of Actual Situation of Complex Selective Mutism and Verification of Effect and Practice of Collaborative Support Between Educational Institutions and Third-party Institutions

研究代表者
武田　篤（Takeda, Atsushi）

秋田大学・教育学研究科・教授

研究者番号：１０３３３９１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，自閉スペクトラム症（ASD）傾向を示す場面緘黙（SM）の実態を明らかにし，効果的な支援方法の知見を蓄積するために行われた。幼稚園と小学校を対象とした調査では，SM児の多くが同時にASDの傾向を示すことが明らかとなった。また，ASD傾向を示すSM児に対する支援では，SMの解消に向けたアプローチと対人関係の構築に向けたアプローチを併用して実施した。その結果，SMの症状が解消するにつれ，他者との関係構築や他者理解の難しさといったASD領域の問題が表面化していった。ASD傾向を示すSM児への支援では，社会性の困難さを把握しながら，長期的な介入を視野に入れた支援を行っていくことが必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでSM児に対しては，「話せるようになる」ことに支援の焦点があてられてきた。しかし，本研究結果は，SM児の多くがASDの特性を有する可能性を示したことから，教育現場などでSM児の支援にあたる際には，ASDのアセスメントを必ず行い，その教育的ニーズを明確にしながら具体的な支援を展開していくことの必要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to investigate the actual condition of selective mutism (SM) with autism spectrum disorder (ASD) tendency and to accumulate knowledge of effective support methods. A survey of kindergartens and elementary schools revealed that many SM children tend to have ASD. For support for SM children who tend to have ASD, we used both an approach to eliminate SM and an approach to build interpersonal relationships. As a result, SM was resolved, but problems in the ASD area such as building relationships with others and difficulty in understanding others surfaced. In support for SM children with ASD tendency, it is necessary to provide support with a view to long-term intervention while understanding social difficulties.

研究分野：特別支援教育関連

キーワード：場面緘黙　複合的場面緘黙　自閉スペクトラム症

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

場面緘黙 (Selective Mutism; 以下、SM) は、家庭では話すことができるのに学校や幼稚園などの社会的場面において話すことが難しい状態である。DSM-5 において場面緘黙は不安障害の一種に位置付けられている。これまで申請者らは、SM 児への個別支援における介入方法と予後の関係に関する文献研究 (鈴木・五十嵐, 2016) や SM 児への教育相談活動を行ってきた (高田屋・武田, 2014)。

DSM-5 における SM の診断基準では、SM の症状が自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; 以下、ASD) に起因するものではないことが明記されている。つまり、医学的診断においては、SM と ASD が併存することは想定されていない。ただし、Kristensen (2000) が SM 児の 68.5%に何らかの発達障害が併存していると指摘しているように、臨床場面において SM と ASD の併存するケースが存在しており、そのような児には両者の特徴を踏まえたアプローチを行うことが望まれる。このように、SM と ASD が併存するケースに関する知見は少なからず報告されているものの、それらは併存する障害との相違点や類似点に着目したものが多く、SM の程度等の関連や具体的な支援方略に関する検討は行われてこなかった。

SM と ASD の特徴を示す児に対して、双方からアプローチを検討するのではなく、両者を踏まえたアプローチを検討することは、昨今の支援を要する児童生徒の状態像が多様化し、それらの対応に迫られる教育現場に求められていると言えよう。これらのことから、本研究では、1) SM と ASD の関係について SM の程度や ASD 傾向を踏まえた検討を行う、2) SM と ASD が併存するケースを対象とした介入支援を行い、支援方略とその効果について検証する必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究では、ASD 傾向を示す SM 児の実態を把握するとともに、効果的な支援方法に関する具体的知見を蓄積することを目的とした。

３．研究の方法

1) ASD 傾向を示す SM 児の実態把握については小学校及び幼稚園・こども園を対象とした質問紙調査を実施する、2) 効果的な支援方略については ASD 傾向を示す SM 児への介入支援を行うこととした。

1）について

B 市の小学校（41 校）及び幼稚園（6 園)・こども園（11 園）の 58 校園を対象に、質問紙調査を行った。まず、全体調査として在籍する幼児・児童数、SM 児の有無を尋ねた。「有り」と回答した場合に、該当児のクラス担任を対象に、次のフェイスシート及び SM の程度、ASD 傾向に関する質問紙への回答を求めた。フェイスシートでは、該当児の年齢と性別を尋ねた。SM の程度については、場面緘黙質問紙票（SMQ-R）を用いた。ASD 傾向については自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版・児童用における社会的スキル・注意の切り替え・細部への関心・想像力の各 10 項目（合計 40 項目）を用いた。51 校園から回答があり（回収率 87.9%)、13 校園に 20 名の SM 児が在籍していることを把握した。後日、SM 児のクラス担任に対して、同じクラスに在籍する定型発達児（1 名）と ASD 児（1 名）について上記と同様の質問紙への回答を依頼した。17 名の SM 児が在籍する 10 校園から回答があり（回収率 76.9%)、定型発達児 12 名、ASD 児 12 名分の回答を得た。これらの調査を踏まえ、得られたデータを SM グループ（17 名)、定型発達グループ（12 名)、ASD グループ（12 名）に分け、各グループにおける SMQ-R スコアと AQ スコアについて分析を行った。なお、2 グループの比較は Mann-Whitney の U 検定を行い、3 グループの比較は Kruskal-Wallis 検定を実施した。

2）について

B 県内の高等学校に通う 16 歳の女子生徒を対象とした。初回面談時に本人へ SMQ-R と AQ への回答を求めたところ、SMQ-R9 点、AQ36 点であった。期間は 20XX 年 10 月から 20XX +1 年 7 月までの 10 ヶ月であった。介入方法としては、遠隔（Zoom）での面接（1 時間程度）を定期的に合計 20 回実施した。加えて、担任から学校での様子について定期的に情報提供を受けるとともに、学校生活を支えるための環境調整を実施した。

面接は 3 期（1 期：不安場面のレベル分けと対処法の検討、2 期：発話できる他者の拡大及び学校での環境調整の実施、3 期：エクスポージャー法の実施）に分け、各時期によって面接の内容を変えた。面接後は振り返りシート（緊張レベル・ワクワクレベルを 10 段階で評価）に記入し

てもらった。

４．研究成果

1）3 グループにおける SMQ-R スコアと AQ スコアについて

SMQ-R スコアの中央値（最小-最大）は、SM グループ 14.0（5.0-18.0）、ASD グループ 1.0（0-11.0）、定型発達グループ 0（0-3.0）であった。グループ間で有意差が認められたため($p<0.01$)、複数の比較を行った。その結果、SM グループは ASD グループ（$p<0.01$）と定型発達グループ($p<0.01$）よりも有意に高い得点を示したが、ASD グループと定型発達グループの間に有意差は認められなかった。

AQ スコアの中央値（最小-最大）は、SM グループ 18.0（9.0-32.0）、ASD グループ 23.5（13.0-34.1）、定型発達グループ 7.0（1.0-13.0）であった。グループ間で有意差が認められたため($p<0.01$)、複数の比較を行った。その結果、SM グループと ASD グループの両方が定型発達グループよりも有意に高いスコア（$p<0.01$）を示したが、両グループの間に有意差は認められなかった。

2）SM 児への介入支援について

1 期において、面談を開始した当初は話し出すまでに時間がかかる、表情が固くなるといった様子が見られた。その後、徐々に話し出すまでの時間は短くなり、学校生活で緊張する場面の整理、そのような場面でどのような方法をとれば緊張が和らぐかを話し合った。

2 期では、面接の途中から大学生が参加し、対象児とコミュニケーションをとった。始めた当初は話し出すまでに時間を要したものの、事前に質問内容を考える・トークテーマを知らせることで、談笑するなどのリラックスした様子を見せるようになった。なお、2 期から授業や部活動、学校行事で対象児が緊張しないような配慮（手立て）を検討し、学校側に実施してもらった。

3 期では、2 期での大学生とのコミュニケーションを継続しつつ、1 期で話し合った学校で緊張する場面について、緊張レベルが低いものからエクスポージャーを行った。結果は概ね良好であり、たとえうまくいかなかったとしても、対象児自身が「次は○○したいと思う」と振り返るなど、結果に一喜一憂せず、徐々に発話場面を拡大させていった。

振り返りシートの評価では、1 期は緊張レベルが高く、ワクワクレベルが低かった。そのような傾向は 2 期から徐々に変わり始め、3 期途中から緊張レベルを低く、ワクワクレベルを高く評価するようになった。

3）まとめ

1)において、SMQ-R スコアでは SM グループは他のグループよりもスコアが高かったのに対して、AQ スコアでは、SM グループと ASD グループの両方が定型発達グループよりもスコアが高かったものの、両者の間に有意差は認められなかった。これらのことから、SM 児の多くが ASD 傾向を示すことが示唆された。本調査においては、SM 児のクラス担任を調査対象としており、家庭での様子等については担任が知りうる範囲での回答を求めていたことから、今後は保護者等への聞き取りを通して、本知見の妥当性を再検証していく必要がある。

2)では、ASD 傾向を示す SM 児に対して、SM の解消に向けたアプローチと対人関係の構築に向けたアプローチを実施した。後者においては「定期的に大学生とのコミュニケーション場面」を確保し、対象児と大学生が良好な関係を築けるようにトークテーマを設定したり、事前に質問内容を考えたりした。結果として、対象児の SM 症状は解消に向かっていったことから、一定の成果を挙げることができたと言えよう。他方、SM 症状が改善されていく中で、級友から誤解されるような発言を行ったりするなど、対象児の問題は SM 症状から他者との関係構築や他者理解といった ASD 領域の問題へと移り変わっていった。本研究では、SM 症状が解消した時点で介入を終了したものの、今後は ASD 傾向を示す SM 児に対してより長期的な介入を行い、より効果的な支援方法を検討するとともに、両者の特徴を有する児の社会生活における困難を把握していく必要がある。

＜引用文献＞

1）Kristensen, H.（2000）Selective mutism and comorbidity with developmental disorder/delay, anxiety disorder, and elimination disorder. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry,* 39, 249-256.

2）鈴木徹・五十嵐一徳（2016）選択性緘黙児における状態像の違いが介入効果に及ぼす影響に関する文献的検討-1990 年以降の個別事例研究を中心に-．発達障害研究，38，100-110.

3）高田屋陽子・武田篤（2014）選択性緘黙の児童への関係性を重視した教育相談の取り組み−自閉症スペクトラムの教育的アプローチを取り入れた事例的検討−．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 ，36，81−88.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 SUZUKI Toru、TAKEDA Atsushi、TAKADAYA Yoko、FUJII Yoshihiro	４．巻 19
２．論文標題 Examining the Relationship between Selective Mutism and Autism Spectrum Disorder	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Asian Journal of Human Services	６．最初と最後の頁 55～62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14391/ajhs.19.55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木徹，藤井慶博，武田篤
２．発表標題 場面緘黙のある高校生に対する段階的な介入の効果ー遠隔での面談、学校の環境調整、エクスポージャー法の実施を通してー
３．学会等名 日本特殊教育学会　第59回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 永戸千賀，武田篤，鈴木龍也，新井敏彦
２．発表標題 広汎性発達障がいが疑われる場面緘黙のある不登校生徒への支援(3) ～場面緘黙と自閉スペクトラム症の特性に配慮した指導・ 支援のあり方の検討～
３．学会等名 日本特殊教育学会　第58回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鈴木徹，高田屋陽子，藤井慶博，武田篤
２．発表標題 場面緘黙と自閉症スペクトラム障害の関連および教育現場の実態に関する調査
３．学会等名 日本特殊教育学会　第57回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 永戸千賀，武田篤，鈴木龍也，新井敏彦
２．発表標題 広汎性発達障がいが疑われる選択性緘黙のある不登校生徒への支援（２）
３．学会等名 日本特殊教育学会　第57回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 永戸千賀，武田篤，鈴木龍也，新井敏彦
２．発表標題 広汎性発達障がいが疑われる選択性緘黙のある不登校生徒への支援 ー障がい特性に配慮した支援の実際ー
３．学会等名 日本特殊教育学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　徹 (Suzuki Toru) (10735278)	秋田大学・教育文化学部・准教授 (11401)	
研究分担者	藤井　慶博 (Fujii Yoshihiro) (20711542)	秋田大学・教育学研究科・教授 (11401)	
研究分担者	高田屋　陽子 (Takadaya Yoko) (80806175)	秋田大学・教育文化学部・准教授 (11401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関